

今年度の調査・検討内容について(鳥類)

1. モニタリング手法の確立していない狩猟鳥獣のモニタリング手法について

(1) ウズラ

1) 今年度の取組

取組	内容
繁殖期の試行調査	・ プレイバック法による最適な調査時期の確定に向けて、5月下旬と6月下旬に調査を実施し有効性を検証した。 ・ 調査適地となる環境条件を確定させるため、河川敷と類似した牧草地と小麦畑で調査し有効性を検証した。
非繁殖期の試行調査	・ 猟犬による追い出し法による最適な調査時期を確定させるため、11月中旬に調査を実施し有効性を検証した。 ・ 新たに鹿児島県、福岡県、千葉県で調査を実施し、既存手法が他地域でも適用できるか検証した。

2) 今年度の取組結果

取組	結果
繁殖期の試行調査	・ <u>5月下旬は、プレイバックへの反応は良いが確認個体数は少なく、飛来個体がまだ少ない時期であり、調査時期としてはやや早いと推測された。特に十勝地方ではその傾向が高いものと思われる。</u> ・ <u>6月下旬でも囀りは確認できるものの、プレイバックへの反応は鈍くなり、6月下旬のプレイバック法は適さなくなる。</u> ・ <u>プレイバック調査に最適なのは、6月上旬から中旬までの10日～14日間ほどの短い期間であると示唆された。</u> ・ <u>牧草の採草地や小麦畑の環境にも生息が確認され、調査適地の可能性が示唆された。</u>
非繁殖期の試行調査	・ <u>いずれの調査地でもウズラを確認することはできなかった。11月は、年によってウズラがまだ渡来していないなど不安定であり、調査時期としては不適であることが示唆された。</u> ・ <u>千葉県でも、ウズラを確認することはできなかった。関東では極端に越冬期の生息数(渡来数)が少ない、又は不安定であるなどの理由が推測された。</u>

3) モニタリング手法の検討

今年度までの調査検討により、モニタリング手法に関する一定の知見が蓄積されたことから、ウズラ調査手法マニュアル(案)(参考資料3)を作成した。

【ウズラ調査手法マニュアル(案)】の概要

- ・ 生息状況モニタリングのための調査手法を解説するものであるが、全国の生息情報が不十分であるため、生息情報の蓄積として活用することも重視した。
- ・ 関係行政機関、研究機関、自然保護団体等、多くの関係者に活用いただくことを想定した。
- ・ マニュアルは4章(1. ウズラとは 2. ウズラの生息分布情報 3. 繁殖期の最適な調査方法 4. 非繁殖期の最適な調査方法)から構成されている。以下にそれぞれの章の簡単な内容を示す。
- ・ 1. ウズラとは : ウズラの基礎情報として、分類や形態的特徴、生態などの概要を既存文献の記載を引用して示した。
- ・ 2. ウズラの生息分布情報 : 環境省が把握しているウズラの分布情報について、過去の記録として自然環境基礎調査結果を、近年(過去10年間程度)の記録として捕獲位置情報や各種調査結果等を、繁殖期(6・7月)と非繁殖期(11月～3月)に分けて図示した。
- ・ 3. 繁殖期の最適な調査方法 : これまでに北海道で実施した試行調査から、最適な調査方法を「プレイバック法」として、最適な調査時期、時間、場所、体制、詳細な調査手順を示した。
- ・ 4. 非繁殖期の最適な調査方法 : これまでに九州で実施した試行調査から、最適な調査方法を「猟犬による追い出し法」として、最適な調査時期、時間、場所、体制、詳細な調査手順を示した。

(2) ヤマシギ

1) 今年度の取組

取組	内容
繁殖期の調査	- 初めて繁殖期における試行調査を実施した。 - 繁殖期の雄によるフライトディスプレイ飛翔時に発する鳴き声を直接観察して生息を確認する試行調査を実施し、有効性を検証した。 - 森林域の林道などにルートを設定し、車で移動しつつ300m置きのポイントに止まって3分間静聴する短時間のポイントセンサスとした。 - プレイバック法の有効性検証のため、調査中にヤマシギの鳴き声音を上空へ向けて再生し、反応を確認した。 - 道央（札幌市、江別市）、道東（音更町）の2地点に、2ルートずつ計8ルートを設定し調査を実施した。
非繁殖期の調査	- ライトセンサス法による最適な調査時期の確定を目的とした試行調査（平成23年度に続く2回目）を実施し有効性を検証した。 - 千葉県、茨城県（新規）で11月と12月に1回ずつ、石川県で11月に1回実施した。

2) 今年度の取組結果

取組	結果
繁殖期の調査	- 大径木のあるまとまった森林環境は好適な生息地と考えられた。 6月下旬でもディスプレイ飛翔を確認することができ、調査手法として用いた3分間のポイントセンサスでも生息確認することは十分可能であった。 - ディスプレイ飛翔は日没前の薄暮の状態から開始され、21時にはほぼ活動を終了することが示唆された。 - プレイバック反応について、6月下旬は全く反応を示さないことが確認された。
非繁殖期の調査	- 千葉、茨城、石川ともに11月より12月の方が確認頻度や確認個体数が多く、安定した調査結果が得られた。 12月の調査ではライトに照らされた際にすぐに飛び立つ個体が少なく、種を識別しやすい傾向が見られた。 12月中が調査適期であることが示唆された。

3) 今後の課題

取組	課題
繁殖期の調査手法	・ 今年度用いた試行調査手法は、生息の確認はできるが、確認個体の縄張り面積等が不明な状況では、生息数やその年変動を把握するデータとして扱うことは困難。 ・ 海外の文献により、フランス等の独自のモニタリング調査手法(雄のディスプレイ飛翔時の鳴き声から生息数を推定する手法)を確認した。当該手法の活用のためには、ヨーロッパと日本のヤマシギの生態や生息地の状況等を勘案した有効性の検証が必要だが、日本のヤマシギの生態等に係る基礎的知見が不足。
非繁殖期の調査手法	・ 調査適地の検討のため、生息環境に係る知見を更に蓄積することが望ましい。 ・ 本調査は、タシギ等の類似種と区別する必要が求められるため、鳥類の識別能力を持つ者が調査員となる必要がある。

(3) ヤマドリ

1) 今年度の取組

取組内容
・ 都道府県へのアンケートを実施し、ヤマドリの出合数調査に関する調査時期や詳細な調査方法等について、実態把握を行った。 ・ 実際の出合数調査への同行及び狩猟者へのヒアリングを実施し、出合数調査の現状把握と課題の抽出を行った。

2) 今年度の取組結果

取組	結果
都道府県へのアンケート調査	・ 出合数調査による集計データは、初猟日のみのデータを集計しており、<u>調査日のばらつきはほとんどない。</u> ・ 都道府県間では、調査手法のばらつきが見られたが、各都道府県においては、これまで継続して同じ手法で調査を継続している。このため、<u>各都道府県単体でデータをまとめることで、その都道府県における生息動向のトレンドをより正確に把握できる可能性がある。</u>
狩猟者への同行・ヒアリング調査	・ 福井県では、初猟日（出合数調査実施日）にヤマドリ猟がほとんど実施されない（山に雪が降りヤマドリが麓に降りてきてからヤマドリ猟が開始される）。このため、初猟日の出合数調査では、ヤマドリの生息数を正確に把握することは困難。 ・ 出猟時にはメスとの出合が多いが、出合数調査結果はオスの数の方が多いということがある。この理由として、オスメスの区別がしっかりできていない、聞き取り者への聞き方に問題がある等の可能性がある。 ・ 狩猟者のデータに頼るのは限界かもしれない。どちらにしても狩猟者数が激減しており、別途調査手法を考えることも重要ではないか。

2. 既存調査データの活用によるモニタリングの可能性について

1) 今年度の取組

平成 24 年度の検討会において、追加的モニタリングの必要性（優先度）が「中」と判断されたタシギ及びバンについて、既存のモニタリング調査結果の活用を検討した。

対象種	検討状況と結果
タシギ	・ 環境省モニタリングサイト 1000（シギ・チドリ類調査）の調査結果の活用可能性について検討した。 ・ コアサイトは調査実施箇所の位置、数ともにほぼ一定しており、コアサイトでの調査結果はモニタリング情報として適していると考えられる。 ・ 一般サイトであっても、毎年中断することなく調査が実施されているサイトであれば、同様にモニタリング情報として適していると考えられる。 ・ 以上から、既存の捕獲数や捕獲位置情報と組み合わせ、生息動向を把握するための情報として活用することは十分可能であると考えられる。
バン	・ モニタリングサイト 1000（ガンカモ類調査）の調査結果の活用可能性について検討した。 ・ タシギに比べて、確認サイト数や確認個体数が少なく、また毎年確実に個体が確認されているサイトも少ないため、全国的な動向把握についての有効性は不明。 ・ 確実な調査の継続等、調査体制が更に充実すれば、有効な生息動向のモニタリング情報として補助的に活用することは可能と考えられる。